

令和8年度第4次 連合教職大学院 入学試験問題

[高度教職開発専攻]

小論文

注 意

1. 問題冊子は、試験開始の合図があるまで開かないこと。
2. 解答は、すべて別紙解答用紙の所定欄に記入すること。
3. この問題冊子は、表紙を除いて3枚である。もし不備の場合は、直ちに申し出ること。
4. 解答用紙は1枚である。所定欄に、受験番号及び氏名を明確に記入すること。
5. 下書用紙は、1枚である。
6. 試験終了後、この問題冊子及び下書用紙は、持ち帰ること。

問 以下の文章を読んで著者の主張を要約しなさい。また、著者の主張に対して、あなたの考えを述べなさい。

(横書き八〇〇字以内)

学校が変わることの意味

学校は「情性が強いシステム」です。入力から出力までに時間がかかるということであり、つまり教育に対して、何かしらの働きかけをしても「なかなか変わらない」ということになります。この点是不登校への対応や、学校で起こるさまざまな問題への対処の遅さとして批判されがちですね。一斉教育には問題があるのになかなか改善されないとか、多様性を認める形になっていないとか。

ですが、学校が「情性が強いシステム」になっているのには、ちゃんと理由があります。社会状況がどれだけ変わっても、世の中がどんなに混乱したとしても、学校は「そう簡単に変わるわけにはいかない」のです。社会状況や世の中の雰囲気や学校がころころ変わってしまうえば、次世代を担う子どもたちに「安定した教育」を提供することができなくなります。教育というのは水などと同じ社会的共通資本ですから、どんなに社会が混乱しようが、天変地異が起ころうが「一定以上の質のものを提供し続ける」ことが重要です。社会全体が安定的成熟を得るために、教育は「そう簡単に変わらないもの」「そのように設計されている制度」なんです。

ただ、そんな「情性の強いシステム」を備えた学校でさえ、ここ数十年の間で少しずつ変わってきています。

例えば、通知表一つとってもこの五〇年くらいでかなり内容が変わっています。五〇年前の通知表は、かなり子どもの問題を指摘する形で記述されていましたが、最近ではそういった内容を書くことはまったくありません。学校が「子ども個人の特徴・特性について、批判的に明示すること」は無くなったと言ってよいでしょう。

他にも色んなことが変わりました。

成績が貼り出されることはなくなったり、食べられない給食を前にずっと残されるということもなくなりました。

昔から変わらず存在していた「宿題、やったけど忘れてきました」という子どもには「じゃあ、明日持ってきてね」で終わりです。下手に「本当はやつてないだろう」などと言えば、たちまち親から「うちの子が嘘をついたというのか」と電話が入ります。

私はかつて肥満体型でしたが、通っていた小学校では男女問わず肥満体型の子どもだけ給食時間に集められて食べ方指導をしていました。今の時代だと考えられない話ですよ。

このように、子どもの「特徴・特性」に対して、ずかずかと学校が踏み込んでくることがなくなり、証拠が無いことについては追及せず、子どもが不快に感じるような関わりを学校は相対的にしなくなりました。

このような「学校の変化」は学校単体で生じることは決してありません。社会からそうした「入力」が絶えずなされていくからこそ、学校という「惰性の強いシステム」でさえ変わってきたと考えるのが妥当です。すなわち、社会全体に「子どもを不快にさせる」ということへの忌避感・嫌悪感が広がっており、それを受けて学校というシステムでさえ変化してきたというわけです。

「要らない不快」と「成長のための不快」

ただ、本当に「子どもを不快にさせる」ということが問題なのでしょうか？

「子どもの不快」は反応の仕方の一つに過ぎません。その「不快」がどういったしくみで生じているのかを考えて接することが重要であり、「不快」だから不快にした人が悪いとか、「不快」を除かねばならないというわけではないはずです。

子どもが感じる不快をきちんと見分けていくことは、とても大切なことです。

見分ける必要のある不快の一つは「要らない不快」です。体験することに何の意味もない不快であり、例えば、いじめられること、人格を軽んじられること、暴力を受けることなどです。こういうものは、できる限り自分に降りかからないようにすることが大事であり、そういう状況を避けたり、逃げたりすることが大切です。

もう一つは「成長のための不快」です。それを経ることで成長につながるような不快であり、例えば、間違っていることや悪いことを指摘される、自分の限界に気づかされる、他者との意見の違いを経験するなどです。こういう不快については、受けとめ、自分の中で消化していくことが重要になります。

【事例1…修学旅行中に担任に電話する母親】

不登校気味の高校二年生女子の母親。修学旅行中に担任に対して「娘が面白くないとメールしてきた。何とかしてあげてください」と連絡してくる。

修学旅行中は人間関係の交錯が起きやすい（自由時間に誰と回るか、バスで誰が隣か、班の一人が戻ってこない……など）ので楽しいばかりでないのが普通です。ただ、こうした人間関係の交錯が起こることによって子どもたちが成長する機会となるのも事実です。しかし、この事例の母親は子どもが不快であることをとことん排除しようとして、かなり非常識な行動を取っています。母親が「子どもの不快に過敏に反応する」からこそ、子どもが母親に「面白くない」と連絡したのだと思いますし、これまでも「不快の主張」によって母親を操作して環境を変えてきた可能性も考えねばなりません。

子どもが不快だからといって、不快が生じるあらゆる状況を排除・操作してしまえば、成長に欠かせないような出来事を「要らない不快」と考えて回避してしまい、せっかくの成長の機会が失われることになってしまいます。

また、社会の中で自分が失敗したことを指摘されて「パワハラ」と言ったり、相手が思った通りにしてくれないだけで「あの人はおかしい」と言ったりしていれば、当然、成長することも、自分以外の人が「思い通りにはならない」という当たり前の感覚が身につくことも起こらなくなります。

「褒めて伸ばす」が変質してしまっている

「子どもを不快にすることへの拒否感」と関連がありそうな社会の風潮として「褒めて伸ばす」が

あります。

社会の中でかなり市民権を得ているように見える「褒めて伸ばす」という子育ての在り方ですが、カウンセリングで多くの家庭を見の中で「褒めて伸ばしている」つもりが、いつの間にか「子どもの問題を指摘しない」「ネガティブなところを示さない」という形に変質してしまっていることがあります。

本来、「褒めて伸ばす」とは、「ネガティブな面は見せない」ということではないはずですが。ポジティブなところだけを伝えて褒めるのに、ネガティブなところを無かったかのように振る舞うということとは、子どもを根っこの部分では弱い存在だと見なしているのです。無自覚のうちに「ネガティブなところを示すとショックを受けて立ち直れないだろう」「この子にはそんなパワーはないだろう」と子どもの力を低く見積もっているからこそ、子どもがショックを受けるような情報を誤魔化したり加工したりするのです。こうした「現実の加工」を子どもへの「優しさ」と考えるのは、周囲の大人が抱えている「子どもを信じることができない弱さ」への言い訳です。

自己肯定感という言葉があります。定義は色んな人が色々言っていますが、ここでは文字通り「ありのままの自分を肯定する感覚」と思っていたら問題ありません。

人間にはポジティブな面もあれば、ネガティブな面もあるのが当たり前です。このいずれに対して「自分の大切な一部だ」と思えること、そういうネガティブな面を持つ自分であっても「肯定することができる」という実感を指して「自己肯定感」と呼ぶのです。

本書で何度も述べてきた「世界からの押し返し」とは、こういうネガティブな面もきちんと子どもに示していきましょう、そして「関係性の中で不快感を納める」とはネガティブな面がある子どもであっても「そういうあなたが大切だ」「そんなあなたと生きていく覚悟がある」ということを伝えていきましょう、ということなんです。